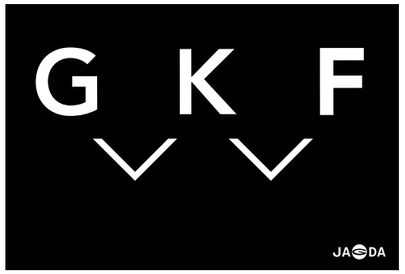
予告 Future Event **関連企画**

JAGDA新人賞受賞作家作品展2007 軍司寛・小林洋介・古屋友章

2008年1月15日［火］－19日［土］
12:00➜18:00　会期中無休　入場無料
会　　場：アート＆デザインセンター
主　　催：名古屋芸術大学
特別協力：社団法人日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)
協　　力：クリエイションギャラリーG8
　　株式会社ナナオ、名古屋芸術大学後援会



関連企画

受賞者3名による公開レクチャー＆トーク
2008年1月19日［土］
13:00―16:00
B棟2F大講義室　入場無料

1978年に発足した社団法人日本グラフィックデザイナー協会は、現在、会員数約2,500名を誇る日本最大規模のデザイン団体として、多彩な活動を行っています。その一環として1983年より毎年、会員作品集『Graphic Design in Japan』出品者の中から、39歳以下の新鮮かつ作品の質の高いデザイナーに「JAGDA新人賞」を贈っています。新世代のデザイン界を担う3名の受賞作品および近作をご紹介いたします。

AFTER REMISEN #9 近藤千鶴＋早川知加子展

2008年1月29日［火］－2月8日［金］
12:00➜18:00
（最終日は17:00まで、2/3～2/6は休館）　入場無料
会　　場：アート＆デザインセンター
主　　催：名古屋芸術大学美術学部版画研究室
後　　援：名古屋芸術大学後援会、P.S. COMPANY

今回で9回目となるデンマーク、ブランデ市のレミセンアカデミーとの国際交流プロジェクト。2007年度にデンマークに招かれ、滞在制作および展覧会を行った、本学卒業生近藤千鶴と早川知加子の帰国報告展を開催いたします。

アート&デザインセンター 展覧会スケジュール
1 EXHIBITION SCHEDULE 3
Open 12:00―18:00
（最終日は17:00まで）
日曜・祝祭日休館（但し3/2は開館）

［入場無料］となんでもご覧いただけます。

1/ 7月→ 1/11金		日本画3年作品展
1/15火→ 1/19土		JAGDA新人賞受賞作家作品展2007
1/29火→ 2/ 8金		AFTER REMISEN#9 近藤千鶴＋早川知加子展
3/26水→ 4/ 9水		本学名誉教授　佐藤圀夫展

第35回名古屋芸術大学卒業制作展

2/27水→ 3/ 2日	10:00-18:00（金曜日は20:00まで）	美術学部絵画科日本画／洋画コース・美術文化学科・デザイン学部デザイン学科 愛知県美術館ギャラリー
2/26火→ 3/ 2日	9:30-19:00（日曜日は17:00まで）	美術学部造形科・版画選択コース・デザイン学部デザイン学科 名古屋市民ギャラリー矢田
2/26火→ 3/ 2日	10:00-18:00（日曜日は17:00まで）	美術学部・デザイン学部 名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

第12回名古屋芸術大学大学院美術研究科／デザイン研究科修了制作展

3/ 4火→ 3/ 9日	10:00-19:00（日曜日は17:00まで）	名古屋市民ギャラリー矢田

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

編集後記

おせち料理は日本のスローフードだと気づきました。手間ひまと心を込めて作られています。じっくりと時間をかけて作り、数日間かけて、ゆっくりいただきます。いつの間にか世の中はとても便利になり、元旦からスーパーもレストランも開いており、日持ちするお料理など必要ないのかもしれません。

子どもの頃、高度成長まっただ中でした。家電など日々暮らしが進化していくのを体感した時代でした。便利な世の中になってみると、便利すぎることに不安を感じます。勝手な言い分です。

「知足最富」。今年もよろしくお願い申し上げます。

Ble　Vol.19
発行日　2008年1月18日
編　集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326（代表）
Tel/Fax. 0568-24-2897（直通）
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　刷　サンメッセ株式会社
2007　Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるが下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

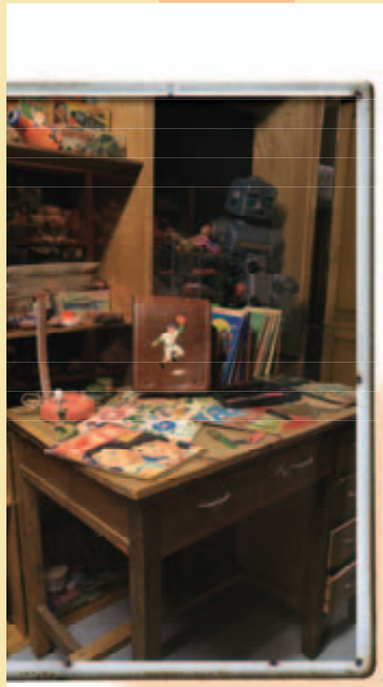
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2008 Vol.19
ART & DESIGN CENTER NEWS



特集 nostalgia

「昭和」を楽しむ

昭和日常博物館案内

2005年11月に公開され話題となった映画、「ALWAYS三丁目の夕日」から2年、先頃その続編が封切りとなった。いずれも昭和30年代の変貌する東京を舞台としたストーリーである。原作は西岸良平氏の短編漫画シリーズ「三丁目の夕日」（ビックコミックオリジナル／小学館）で、膨大な数の作品の中からそのイメージが、コラージュのように映像化されている。

元号「平成」になってからはや20年程、たまたまの区切りであると思いながらも、多くのメディアが「昭和」について様々に取り上げ、昭和時代の暮らしや文化への関心が高まり、人々の注目を集めているようだ。このような流れの先駆けとして、全国に影響を与えた博物館が本学近くにある。北名古屋市歴史民俗資料館である。1990年の開館時は、師勝町歴史民俗資料館の名で、各地の同種施設同様に、地域の農具や生活用具が並び、土地柄、縄文時代からの埋蔵文化財の出土品が、主に展示されていた。

その後3年程過ぎた頃、「屋根裏の蜜柑箱は宝箱」という企画展があり、屋根裏から床下まで、箱や引き出しなど日常の中でタイムカプセルを見出して、埋もれた資料と向き合うことがとても新鮮に感じられた。丁度その時期に、本学学生が博物館の実習でお世話になる機会があり、館を訪れた私は、同館学芸員として現在も中心的に活動されている市橋芳則氏との出会いを得た。同時期私の研究室では、埋もれつつあった主に「昭和時代」のデザインや、それにかかわる周辺資料を何とかしようとしていたこともあって、話が弾む中、「水のない水族館」コレクションとは何か―その在り方と方法―という企画展に協力展示する事になった。以来今日まで、年2回の企画展と1回の特別展の連続の中で、企画から展示まで、そのつど新しい実験的な試みがなされた。そのことは、来館者の増加とともに全国メディアでもよく取り上げられた。展示の中再現された昭和の情景は、毎回変容しながら次の情景につながった。路地は深まり、店は業種を変えながら、物品は増え、収蔵庫から溢れ出た。過去の時間が緩やかに動き始め、その不思議を感じつつ、今現在もそうであるが、むしろ一方で、その動きは加速して追い越されそうな気配もある。

2006年3月、西春町と師勝町の合併により「北名古屋市歴史民俗資料館」と名称が改まり日も浅いが、全国的には以前より、別名「昭和日常博物館」としてよく知られている。さらにもう一つ、昭和の日常をイメージした空間の中で、やはり全国に先駆けて試みられたことがある。「回想法」の場としての利用であり、活用である。「回想法」は、懐かしい生活用具などから、過去に思いを巡らせ、記憶や体験を語り合うなどして、脳を活性化させる一連のアプローチをさすが、医療や介護の現場に限らず注目されている。ここ数年にわたり、本学学生へデザインによる問題解決や、コミュニケーションについて考える為の研究課題として「回想法」を取り上げている。同館と同回想法センターの協力を得て進めており、関連する福祉施設などで展示発表を行なっている。

「昭和」を時間軸の史実としてだけで捕らえると、学生の殆どが平成生まれに成りつつある現実があり、時間の隔たりは深まるばかりである。館の中で「懐かしい！」と声を上げる小・中学生を見るにつけ、人にとってのノスタルジアとは何であるのかについて問うことにもなる。日々、未体験異空間になるであろう「昭和日常博物館」の現在へ、一度足を運んでほしい。日常と非日常と過去と現在と、少しの未来を想い巡る小旅行として。

デザイン学部デザイン学科教授　落合紀文

2008年1月30日まで、**企画展「新・コドモノコロ双六」**を開催中。
北名古屋市歴史民俗資料館、別名「昭和日常博物館」（旧師勝町歴史民俗資料館）
481-8588 北名古屋市熊之庄御榊53　Tel：0568-25-3600

特集 nostalgia

「昭和」を楽しむ

北名古屋市歴史民族資料館

失われ消えていくモノ。

私たちは自身に必要なモノ、気に入ったモノを自身が暮らす空間のなかに取り込んできた。自身の暮らしのなかに取り込まれたモノは、時間の差はあれ、何れその空間から外されていく。ごく当たり前に普段の暮らしのなかで行われる作業である。

昭和という時代が平成となり、その年を重ねるにつれ、昭和の暮らしのなかで息づいていたモノが消失していった。

昭和日常博物館の活動は、その消失する運命の小品を残していくこと。日常という言葉が冠してあるのは、特別なもの、珍しいものが対象ではなく、私たちが普通に通過してきた暮らしを!というコンセプトである。

1993年に開催した「屋根裏の蜜柑箱は宝箱」は、文化財・工芸品・美術品と呼ばれるもの、また、何百年も前のものではなく、私たちが生活するに必要であったものが貴重であるということを伝えるものであった。しかも、これまで博物館では収集の対象としてこなかった昭和時代、なかでも戦後、昭和30年代のものである。

その後様々な企画展を展開し、昭和30年代という生活が激変した時代をモノで残していく活動を続け、集まったモノを博物館資料としてとらえ、活用を図っている。

縄文時代、それ以前から暮らしの真ん中にあった火・炎が電気・電化製品に変わった昭和30年代、それは、人類史上という言い方をしても過言ではないほど大きな変革であった。

この10年、昭和レトロブームと呼ばれる流行が継続し、幾度となくピークを迎え、だが、衰えることのない状況がある。商業としても「昭和」という単語やその時代背景、デザイン、イメージが多用され集客、販促につながっている。

「ALWAYS　三丁目の夕日」では、前作、続編とも映画制作の美術の方たちと昭和や映画に登場するモノに関する詳細な情報交換をし、北九州市の美術館や四日市市の博物館など資料の貸出しが絶え間ない状況である。

自身の日常的な暮らしを様々な視点から見つめてみる機会として、また、懐かしさ・ノスタルジーが普遍的なものに代わろうとし、「新しい日本の原風景」となろうとしている今を体感してほしい。

北名古屋市歴史民俗資料館 昭和日常博物館　学芸員　市橋芳則
（元本学非常勤講師）

写真（1・2ページとも）：山口幸一　北名古屋市歴史民俗資料館2007年8月開催の「絵空旅」展より

レビュー REVIEW レポート

津田佳紀「歴史画のための調書」展

2007年10月9日－19日
名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」

「2006／原子力発電所／ウェスティングハウス・エレクトリック」

大量消費社会においては、エンドユーザーが購入する「商品」のデザインに関して多くの人々が関心をいだいていると思います。またメディアのかなりの部分はそれらを公開する為の装置として機能しています。しかし、Business to Businessの場面で経済活動をおこなう企業の「商品」のデザインについては、エンドユーザーの眼に触れない中で（むしろ隠蔽されて）存在しているものも多くあります。例えば原子力発電所のプラントは、電力会社が購入した「商品」ですが、安全保安上の理由もあり一般の眼に触れない場所に設置されていたりします。このような特殊な「商品」のデザインや、それを生産する企業についての情報を掘り起こすことが今回の展示の目的のひとつでした。そのようなデザインの元祖としては、フリードリヒ・キットラーが語る、東ドイツ・ウーゼドムにあるナチスのロケット実験場周辺があげられると思います※1。私自身、自らの記憶をたどると、少年時代に福井県の田舎で眼にした原子力発電所とキットラーが語るウーゼドムには共通するものがあったのではないかと思います。今後も、このような近代以降の歴史の中で見えなくなってしまったデザインを記録していきたいと考えています。

デザイン学部デザイン学科准教授　津田佳紀

写真：山田 亘　　※1「キットラー対話　ルフトブリュッケ広場」三元社刊　P18

大崎正裕 展「小さな存在ー白いオブジェ」

2007年11月26日－12月8日
ウェストベスギャラリー・コヅカ　スペースホワイト（名古屋）

地下にひっそりと広がる白く無機質な空間に清潔感のある展示が広がり、モノクロで統一され完璧にフォーマットされたシンプルな写真（インクジェットプリント）が静かな光景を醸し出している。作品は一見すると通常の写真作品のように見えるが、全て２点一組で構成され、よく見るといくつかの仕掛けが施されている。プリントされた作品全てのイメージでは市販のパッケージングされたプラスチック製の人物模型パーツがモチーフとなっているが、それらは日常での仕事のユニフォームなどを纏い、一組のセットとして記録されている。しかしどれもがある一人を失っており、ある種の不完全さをイメージさせる。また対となる小さな作品では、表面を透明なレンズが覆い、その位置が曖昧になり、視点を宙づりにしながらも、その奥底には作者自身が白く扮することで脱個性化し加工されたイメージが移り潜んでいる。

大崎正裕の近年の作品シリーズでは、ある種のオブジェを絵画的な視点でクールにプリント化して自己の存在を再認識し、また疑いが生じることで自己が消滅していくことへの恐怖を表現していると感じさせる。

美術学部絵画科准教授　須田真弘

英国アートメダル協会 学生メダルプロジェクト展

2007年10月26日－31日
名古屋芸術大学アート＆デザインセンター

昨年10月26日から31日までアート＆デザインセンターにて「英国アートメダル協会　学生メダルプロジェクト展」が開催されました。これは英国の"British Art Medal Society"が主催する学生メダルコンペの作品を中心とした展覧会で、学生コンペの作品に加え、プロの彫刻家、メダルデザイナー、本学教員のPhilip Booth、筆者の作品、合わせて70点のメダルが展示されました。学生メダルコンペには本学のデザイン学部、メタル＆ジュエリー選択コースと美術学部工芸選択コース(ガラス)の学生も、2006年と2007年の二度参加して受賞をしています。

イギリスと日本のそれぞれのメダル作品は、多様なアイデアやコンセプトを表現していると同時に、美しく手に取ることができる身近なアートとして、観客の目を楽しませていました。

また、展覧会初日にはBritish Art Medal SocietyのLansman Rob氏他が来学され、展覧会と共に本学の鋳造設備等を見学されました。学内で原型制作、鋳造、仕上げまでできる環境は羨ましいと感心されました。

下記のウェブサイトで画像等ご覧になれます。
British Art Medal Society　http://www.bams.org.uk/
メタル＆ジュエリー選択コース　http://homepage.mac.com/metalumm

デザイン学部デザイン学科講師　瀬田哲司

新實広記　個展

2007年12月1日－9日
ギャラリープランネット（名古屋）

「Composition 1」

初めに目に入るのは、光とガラスのみである。ガラスは、1960年代のデザインで模様付けされた、約30枚の回収された古い窓ガラスである。ガラスが床と接する部分は隙間無く一本の線をなし、そこから、一見何の支えもなく、さりげなく、全体が優雅に立ち上がっている。ガラスはその表面を白いグワッシュで軽く塗られている。その暖かい白の陰影は、型押し模様の溝に溜まっている。また、その優しさと色あせた様は、歴史を感じさせ、過去の記憶を呼び起こす。

この個展における２つの作品は、類似性によってお互いを補完している。どちらも共にインスタレーション的であるが、作品単独として理解することも可能である。この曖昧さは否定されるべき性質のものでは決してなく、むしろ、作品そのものに我々を引き込ませるものである。『コンポジション１』は壁を連想させ、『コンポジション２』は瓦屋根を思い起こさせる。どちらも建築であることを主張していないが、関連性は強い。『コンポジション２』は、ギャラリーの壁に、ひっそりと傾斜して寄りかかっている。作品の下部を見るために屈むと、静かな屋根裏部屋に隠れるような感覚になる。『コンポジション１』の配置は、観る者が作品の後ろ側に回ることもできる。そこでは、より穏やかで私的な空間を体験できる。光は柔らかく黙想の空間である。表側と異なり、それは谷崎潤一郎が、著書「陰翳礼讃」で美しく描いた、伝統的な日本建築の柔らかな光と障子のかすかなプライバシーを思い起こさせるものである。

新實は、官能的な作品で巧みに観る者を魅了する。作品と対峙し、観る者は幻想に引き込まれていく。そして徐々に、伝統的な日本建築が加速度的に消えつつある状況への、彼の痛烈な思いについて考えさせられていく。そして最後に、インスタレーションの柔らかな雰囲気が、より純粋な時代と、過去の文化の必然的な進化へと思いを至らせるのである。

美術学部造形科教授　マイケル・シャイナー

RELAY ESSAY

「無色透明の持つ個性」…… 西村和泉

19世紀の作家モーパッサンが、鉄筋のエッフェル塔を「巨大で不格好な骸骨」と評してから120年近い時を経た今日、パリの街はガラス張りの建物に溢れています。ポンピドゥー・センター、新凱旋門、ルーブルのピラミッド等々…これらは新たなパリの顔として、石造りの荘厳な歴史的建造物の間に堂々とそびえ立っています。小さな文化会館なども含めれば、ガラス建築は相当数にのぼり、これからも増え続けるものと思われます。

私の専門は20世紀フランス文学ですが、正確には「フランス語で書く外国人作家」の研究です。スタンダールの『赤と黒』のように、個性の強い人物が登場する19世紀の小説を「色の文学」とするならば、20世紀は「無色の文学」と呼べるのではないかと思います。実際、20世紀後半の外国人作家は、母国や母語といったアイデンティティの根拠から切り離されても創作を続け、無国籍性を醸し出す名作を沢山残しています。これらの作家の意識を探ることは、異国で暮らす外国人の思いを知ることにも繋がることから、今後の国際交流において重要なテーマの一つであると考えています。

パリの住人の色は実にカラフルです。アラブ系、アフリカ系、アジア系移民の多くは、「自己の色を押さえてフランスに同化するか？色を前面に押し出して対立するか？」という二つの問いの間で揺れ動くと言われていますが、私は第三の可能性として「無色の個性」があると信じています。外国人が考案したものも多いガラス建築の内部では、見えない磁力によって引き寄せられた多様な人間がひしめきあっています。無色透明とは色の欠如ではなく、様々な色を吸収し、変容させ、拡散させるエネルギーと言えるでしょう。21世紀の人間に必要なのも、如何なる色にも変わりうる柔軟さであり、光と闇を共存させる強さであると思っています。

全面ガラス張りのフランス国立図書館
開いた本のかたちをしています。　1994年ドミニク・ペロー設計

美術学部教養部会 講師